

オープンソースの文芸学

クラウドとガラケー

最近ネットメディアなどでは、「クラウド」化についての注目が著しい。

いわゆる「クラウドコンピューティング」については、様々な議論があり、定義さえまだ明確ではない。だがこの言葉が概ね意味する、これまで個人が自前で保持・管理してきたソフトウェアやデータなどを、ネットワーク上のサービス提供者から受け、利用するかたちになるという近未来世界（既に一部は実現しているが）は甚だ魅力的で、好奇心をそそられる。

「クラウド」が情報通信技術分野で主流となり、その夢が現実的なかたちとして完全実現するかどうかについては、まだまだ異論があるだろう。だがマイクロソフト社の Windows

ブランド製品がGUI型OS市場を席捲し、個人所有型コンピュータや携帯電話が本格普及し始めた1990年代に比べると、2010年初頭においては、以前のような大きな夢が、早くもこのネットワーク・コンピュータの分野では描けなくなっていることも事実だろう。マイクロソフト社が2000年代に出した Vista や 7 といった商品が消費者にとつてあまり魅力的には映らず、未だにそれ以前のOS商品が多く使用されているという実体もその一例であるだろうし、「ムーアの法則」が標榜されたかつてとは異なり、CPU開発がむしろ並列化の方向へ向うなど、革命的なハードウェア進化は当面望めないという事情も併せ考える必要がある。一般消費者のIT世界は、亡霊のような旧マイクロソフト製品使用者達がまだ多数を占め、そこに少数のアップル製品愛好者達と、GUIに対応し

辻和彦

たディスプレイ・シヨンのおかげで微増してきてはいるものの、未だキーパーソンズには至っていないリナックス「オタク」達などが彷徨している段階であり、それぞれが異なるベクトルを指標するというまさにカオスの状態でありながら、総合的に見ると早くも保守化、硬直化して来ているとさえ言える。

実際、アップル社の iPhone の成功やグーグル社の Nexus One への注目度などを見ると、IT 業界におけるスマートフォンは、むしろモバイル関連へと向っているように思われる。そうした中で、デスクトップやラップトップ、あるいはモバイルなどといった物理的環境にもはやとらわれない「クラウド」は、やはり確実に新未来を感じさせる概念ではあるだろう。

しかしながら、こうした情報通信技術分野において、少なくとも表に浮上するメディア情報を見る限りにおいては、日本の技術や開発者、あるいは日本企業などがこれからのリーダーシップを多く握っているとは、残念ながらも思えない。昨年「ガラケー」なる言葉が日本における携帯電話産業を揶揄する表現として若年層を中心に使用されていたことは、知る方もいるだろう。ガラバゴス諸島において独自の環境に適應するため、独特の進化を遂げた生態系が存在することは広く知られているが、同様に日本において、独自に高度な進化を遂げながら、かえってその「独自」と「高度」さのために、一向に「グローバルスタンダード」になれない技術が多く存在する

ことは、既に多く指摘されている。デジタルテレビ放送や非接触 ID カードの規格はその一端であるが、特に、恐ろしいまでの「独自」と「高度」さを保持した日本の携帯電話は、それゆえに世界市場で相手にされない「ガラバゴス携帯」、略して「ガラケー」なのである。これが、総じて日本を巡る様々な言説に内省を迫る、極めて鋭い揶揄表現であると考えてしまうのは、私だけののだろうか。

振り返って鑑みると、文芸学（ここでは『混沌』第6号の特集「飛翔し続ける文芸学」での議論と、同号の西尾秀生氏の定義付けを踏まえた上で、広義の意味での「文学」と同様の意味でこの言葉を用いたい）には果たしてどんな未来が待ち受けているのだろうか。

「文芸学部」もしくは「文芸学研究科」という名の組織に属している者として、この問いは極めて恐ろしい。言うまでもなく、「文芸学に未来などない」などという答えに辿り着いてしまったら、それこそ自己のアイデンティティの消滅に對峙しなければならなくなるからである。しかしだからといって、この問いに答えず放置しておくのも、また心穏やかではない。「Memento mori」を挙げるまでもなく、いつかは直面しなければいけない「死」にまったく向かい合わず、誠実に生きることにも困難であるだろう。従って、看板に掲げている以上、そこに属する者が「文芸学」と向き合うことも、おそらく必然と言わ

ざるを得ないのだろう。冒頭に挙げた「クラウド」と「ガラクター」の問題を念頭に置きつつ、これからの「文芸学」の未来を思考してみたい。

かたちあるもの

2009年11月13日に、内閣府が設置した行政刷新会議事業仕分けにおいて、日本の次世代スーパーコンピュータへの文部省予算編成に関して、蓮舫参議院議員が「世界一を目指す理由は何か。2位ではダメなのですか」などと発言したことが広く報道され、話題となったことは記憶に新しい。この発言へ対しては各界から反論が相次ぎ、結局政府は2010年度予算に227億円の計上を決定したものの、この言葉そのもののインパクトは未だ大きいものがあると言わざるを得ない。

かつて「文系学問は趣味の領域で、理系学問こそが実学である」といった、非常に大雑把で、誤った認識がメディアを通じて一般大衆社会に共有された時代もあったが、「2位ではダメか」発言は、その「理系学問」ですら、もはや「利益を産み出さないなど、実際に役に立たないものは総じて悪である」と「新視点」を所有している。およそ研究と名がつく分野に関わりがある人間にとつて、こうした視点が示す未来はとても恐ろしい。厳密に考えると、こうした運動的視点に耐えられる学問

領域など、理系文系を問わず、どれほど存在するのだろうか。「それは実学なのか?」、「それは役に立つのか?」、「それは富を産み出すのか?」、「国際的競争力があるものなのか?」、「予算に見合う活動なのか?」などなど。こうした質問を連発すれば、ほとんどの領域は「明解な解答」など示せず、沈没してしまっただろう。もちろんその「問い」自体の矛盾や過ちに焦点をシフトすれば話は別であるのだが。

だがいざれにしても現代という時代においては、デフレや不景気も手伝って、あらゆることに抽象的な答えを許さず、形而下に引きずり降ろす方向に潮流が向っている。こうした時代に、「夢」や「文化」や「未来」といった「抽象」言語で、真向勝負を挑むのも一つのやり方ではあるだろう。だが、あえて時代に沿ったやり方で、自分達の存在価値を説明していくのも、また社会に対する責任であるだろうし、その方が「あちら側」と議論が噛み合いやすいことも確かだろう。

そのように考えると、逆説的ではあるが、文芸学が抽象的なものであるがゆえに、具体的に説明していく必要があるのではないか、という思いがどうしても湧き上がってくる。あえて挑発的な物言いをするならば、アカデミック・ワールドはある種の幻想を基盤として成立している。「学術」、「高等教育」、「研究」などの語句は未だにある種の権威を帯びており、今のところそのブランドは瓦解していない。だが教育が一つの産業である以上、そこにはビジネスの問題が必ず存在しているわけで

あり、その意味では、「アカデミック・ビジネス」界は先ほどの「ブランド」を派手に看板に掲げ、共有する「夢」を元手に華麗に商売を行なってきたのに、肝心のその足下にあるビジネスそのものについてはあまり話題にしたがらないという悪癖があった。だからといって直ちにビジネスそのものが最重要である、と主張したいわけではない。しかし、かたちにならないものだからこそ、むしろ、かたちあるものに拘っていく必要があるのではないだろうか、という問いはやはり重要であるように思えるのである。

もちろんこうした考えを突き詰めると、身も蓋もない業績主義などに繋がるのであり、「かたち」とは何か、という根源的な問題への取り組みを抜きにして、安易な成果主義に走ることは、先に挙げた「自己のアイデンティティを追求する」行為とは乖離していることは確かだ。だが「アカデミック・ビジネス」が日々生産しているものが何か、という最重要ラインを思い起こせば、逆に「かたち」の意味も自ずと見えてくるのではないか。間違いなく大学が産み出す最も重要なもの（あえて「商品」とは呼びたくないが）は「ひと」である。文芸学を学ぶことがどれほど優秀な人材を排出することに繋がるか（いかに「効率的」に形作り、「大量生産」するのに重要な役割を果たしているか、と言い換えてもよいだろう）ということが立証できれば、文芸学そのものを直接的にこじつけて説明しなくとも、「かたち」を無理に具現化しなくとも、他者も自然に文芸学の

価値を理解してくれるだろう。

思い起こせば、近年文系研究分野においては、もともと成果が「かたち」として見えにくいジャンルだけに、妙に安易な「成果」に飛びつく傾向があった。だがそもそも「最終的にどのような人材をどれほど多く産み出しているのか」という基本に立ち返れば、見た目を誤魔化すためのレッテル貼りや、イメージ戦略などに惑わされなくてもすむはずだ。学業的成績や、各種検定試験、資格試験などの結果は今一度脇に置き、胸を張って「文芸学こそが、このような素晴らしい人材を一般社会にこれほど数多く輩出してきたのだ」と具体的に語ることであれば、それは誰に対しても、何より明解な、文芸学の存在理由証明となるのではないだろうか。

オープンソースであること

冒頭に挙げたとおり、その「独自」さと「高度」さのために、かつて高みに立った者が危機に見舞われているのが日本の情報通信技術分野の現状であるのだが、さらに残念なことに、こうした図式が他の分野でも同時進行していることである。かつて「ウォークマン」ブランドで一世を風靡したはずのポータブル・ミュージックプレーヤーがiPodによって見るも無惨に追いやられたことが象徴的なエピソードであるが、日本の音

楽産業も、著作権への対応の遅れなどにより、世界の潮流から取り残されていっている。独自のデジタルテレビ放送規格に拘ったテレビ放送産業も同様であり、インターネットなどの新メディア登場に揺らがされ、大きな試練に立たされている新聞・雑誌業界もまた同じであろう。

このように考えると、日本における大学や研究というものが直面している危機というものも、また同じ図式であることに気づかずにはいられない。つまり、少なくとも過去においては、日本の高等教育や研究分野というものは、「独自」性や「高度」性を保持していたことは間違いない。だがむしろ現代においては、過去のそれらがむしろ足枷となつて、未来への指標を産み出すことを妨げている傾向にあるのである。

こうした現状を打破するために、あえて同様の病巣に悩む他業界を観察してみると、いずれもその元凶となつている部分がある、旧来の成功モデルや過去の栄光に囚われていることにあるのに気づかされる。従来の方針がうまくいけばいくほど、「成功の図式」のようなものを作り出してしまい、それに執着するのが人の習性である以上、ある意味こうした行為には仕方がない部分や、本人達には変えようのない事情があるのかもしれない。しかしあえて、より広い範疇で、より歴史的に概観するならば、成功モデルには必ず賞味期限が存在することは忘れてはならないのだから。データのデジタル化や、ネットワークでのその価値の真の意味に気がつかず、旧来のビジネスモデルに

執着すれば、iPodのような新しい波に勝てるはずはない。まったく同様に、国際的に見ても極めて安価な電波利用料を総務省に支払っただけで、実質的に巨大な営利事業を広告代理店などと結託して独占するテレビ局商法がいつまでも続くと考えられる方が安易過ぎる。また世界的に見ても稀な「記者クラブ」制度のおかげで「第四権力」の中核に君臨し続けてきた新聞業界も、従来の方があまりに成功し続けたせいで、過度にドメスティックで未来展望が欠落している自分達のシステムについて、これまで内省することがなかった。だがいずれのケースも百年も繁栄を続けたものではなく、せいぜいここ数十年たまたまうまくいっていたに過ぎず、冷静に鑑みるならば、いずれ変革の時が来るのは分かっていたわけであり、それは時間の問題に過ぎなかったのである。

一方海外において、うまく立ち回っている企業や業界を見てみると、大胆に過去の成功モデルを手放している例が多いように思われる。例えば情報通信技術分野では、Windowsブランドにより、マイクロソフト社の「囲い込み」戦略が成功していた時代には、いかにしてアプリケーションなどのソフトウェアから直接的に対価を得るか、ネットワークを利用してどのようにそのサービス利用料を課金するか、ということに多くの関心が集まり、著作権を保持しつつもすべての者に著作物を利用する権利を開く「コピーレフト」運動などはむしろ警戒の目で見られた。だが新世代IT企業のヒーローであるグーグル

社のサービスのほとんどは、広く知られているとおり、無償で提供されている（厳密に言うと、一見無償で提供されている）。グーグル社を始めとしたニューウェイブは、旧ビジネスモデルに勝つために、一見無謀にも古い「囲い込み」戦略を手離したのであり、それ故に新しいビジネスモデルを提示できたのだ。

また同時に、こうした手法が示す重要な事実は、人は「開かれている」方向に自然に向うことだろう。短期的には「囲い込み」は大きな成功を生むかもしれないが、長期的にはそれは保たない。過去において否定されたコピーレフト思想は、フリーソフトウェアを産み、やがてその流れは、新たなビジネスを呼び覚ます「オープンソース」の概念へと繋がった。ソフトウェアが、誰でも自由に再頒布でき、自由にソースコードを利用できれば、未来はどうなるか。一見ビジネスの否定に繋がるのかのようなこの問いが、むしろ新しいビジネスを創生している。例えばオープンソース・ソフトウェアであり、リナックス・ディストリビューションの一つでもあるUbuntuが産み出してきている新しい世界は、一般の利用者にとっても輝かしい未来に映るし、また同時にそこに大きなビジネス・チャンスを見出す投資家や企業家も少なくないはずだ。

この方向性は、文芸学にとっても、十分参考になるのではないだろうか。音楽と同様、著作権の問題はこの分野で避けようのない重要議題であるが、過去において文学業界が、雑誌や新聞などのマスメディアと結託して行なってきた、「囲い込み」

のモデルは、未来でも通じるだろうか。手垢がついた表現ではあるが、「象牙の塔」での高等な研究が、「クオリティー・ペーパー」や高級文芸雑誌での遙かな高みにある知的議論が、はたして次の世代の若者を、次世代インターネット上の極彩色のコンテンツよりも魅了することができるだろうか。

大切なもの

むしろいかなることよりも、「開かれていること」は最重要ではないだろうか。文芸学が、その「独自」性と「高度」性を守るために、これまでうまくいつてきたシステム・プラン（あえてビジネス・プランとは呼ばないが）をあえて手放すことができれば、その上で「開かれた」「オープンソース」のモデルを「かたちあるもの」として示すことができれば、それはむしろ新世代における文芸学の新たな成功の始まりを意味するのではないだろうか。

狭義の意味での文学研究に携わる人間として、いつも興味深く思うのは、公然と文学に死が宣告されてからずいぶん久しいにも関わらず、「文学」の素材が、過去とは比較にならないほど、むしろ増大して流通していることだ。メール。ブログ。掲示板。SNS。Twitter。人は世界規模かつ24時間体制で、文字を読むこと、書くことにひたすら執着し続けている。

これほどまでにそうした手段が広く開かれている時代は、人類史上未だかつてなかった。旧来の文学の死は、むしろ新しい文学の始まりであったのだ。

同様に文芸学も、その定義付けを少し変更するだけで、無限の可能性を手に入れるかもしれない。「混沌」第6号において、清水伊津代氏は「カーニバル的知」の意義を指摘され、濱本秀樹氏は「ordered chaos」の概念の重要性を説かれていた。こうしたアカデミズムの新しい側面を産み出す主体が文芸学であるとするならば、どれほどまでにこの分野には可能性があるのか、計り知れないものがあると思う。いずれにしてもあらゆる生命体がそうであるように、文芸学もまた、進化の最前線で、守りつつ、攻めていかないといけないのだろう。現状に甘んじて停まってしまえば、それは生物にとつて死を意味することになる。より大切なもののため、「大切なもの」をむしろ捨てること^ができれば、明日は明るいものとしてそこにあるのだろう。

冒頭で述べたとおり、「クラウド」の概念は、ハードウェアのこれまでの対立軸を無効にする可能性を秘めている。文芸学がまさにそうした「脱構築的構築物」として進化するのを、併走しつつ、目撃したい。「ガラケー」は少なくとも最初から目指すべきものではないはずだ。